

は相当先になるうから、食糧の確保、官舎内の邦人と結束した行動をとるようになる等、注意指示した。

数日中に、役所(軍)より相当量の食糧が届き、当座の心配はなくなった。その後は、避難できる用意、保存食糧、貴重品等を地下室に隠すなど、忙殺されたが、九月に入り、中国人、ソ連兵等が日本人街に入り、治安が悪化するようになってきた。

予想されたこととはいえ、ただただ、恐怖の一言であつた。さいわいにして、官舎は襲われたが、その被害はわずかなものです。婦女子は地下室に隠れたので、その難はまぬがれた。十一月頃からは、八路軍とソ連軍との交代により、街の治安は保たれるようになった。話によると、相当数の日系住民の犠牲者があつたことを聞き、恐怖でいっぱいであつた。その後、八路軍と国府軍の内戦があり、国府軍の統治となつたが、日本人居留民会へ日本婦人を要求されたので、また後難の狼として、用心だけは注意しあつて、外出等はほとんど男たちの集団行動のみで用事をたして貰つた。

二十年六月始め、老人、女子どもを優先に、奉天地区

第一陣の中に入れられ、鉄西収容所に集結し、貨車で、錦西経由、コロ島港に着いた。その間、停車ごとに国府軍の輸送指揮所にて止められて、金品を要求され、なけなしの金を与えてその難を逃れ、五日目に目的地に到達した。いちおう、収容所に入れられ、二日目より、出国の手続き、きびしい検問、目ぼしいもの、限定以上の金銭等は取り上げられ、ほとんどの人が裸同然になり、五日目にやっと乗船できた。

撃たれた友二人は

東京都 高野 毅

ふるさと、満州奉天で小学校へ通学したころ、馬賊が新市街に出没し、休校となつた記憶があるが、通行人の誘導にあたる警察官のりりしい乗馬姿がなつかしい。

昭和六年四月から奉天郵便局電信課に二年ほど奉職し、満州事変の功労で賜金をいただいた。この郵便局の電話部門が電々公社へ移行されたとき満鉄へ入社し、昭

和十二年の徴兵検査で甲種合格となった。

翌年三月、関東軍第一独立守備隊第二大隊第三中隊に現地入営し、一期の検閲を受けてから関東軍無線電信教習所へ入所した。この鈴木部隊で教育助手のときにノモンハン事変が勃発、第四分隊長要員で待機したが、この事変で多数の戦友が亡くなった。

昭和十四年十二月に原隊（錦県）復帰、ただちに東辺道（鮮満国境付近）の討伐部隊に配属された。そこでは関東軍、満軍、警察大隊と飛行機まで動員した共同作戦が翌年一月中旬まで続いた。

翌年は原隊復帰と同時に北支方面へ向かったが部隊の任務は、八路軍（中国共産軍）が播居していた熱河省、万里の長城付近における掃討作戦であった。現地では通称「スリバチ山」といった地点で夜明けまで激戦が続き、戦況と救援を求める無線連絡を傍受した私は、これを大隊本部へ急報、ラッパの音も勇ましく部隊の全員が出動した。戦死者は下山のうえダビにふし、重軽傷も多数であった。

終戦当時は奉天市和平同沢街（稻葉町）の父が建てた

家に同居、鉄路総局電気部監理課へ通勤していた。終戦で新市街は無政府状態が続き、多数の中国人、朝鮮人が暴動化して治安が極度に悪化していった。

輸送上の要である奉天駅は、暫定措置により日本人憲兵が機関銃で暴徒を威嚇射撃していたが、長続きしなかった。

他方、満鉄奉天本部は近郊の倉庫で保管中の電気材料を大連へ移動するため、監理課で私ともう一人が選ばれた。この輸送上の警護は、本社手配のソ連兵（中尉一、伍長一）が列車に同乗してくれた。

ところが、私の乗った列車が次の渾河駅の鉄橋を渡るや否や、八路軍（共産軍）に銃撃され、これが最終列車となった。

大連では妹の家に約一か月滞在し、奉天は引揚げが始まったという噂なので、列車の全面開通を待たず単身でターチョウに便乗して普蘭店を通過、海城駅付近に到着した。

その夜はその居留民会（空家）に投宿したが、八路軍の襲撃で起こされ、国府軍は既に城内へ逃げていた。

そこを急いで逃げたが、国府軍の飛行機に射撃されたり、八路軍におどかさされ、夢中で郊外へ逃げ、途中で日本人三人と合流した。

四人で歩いて、下山付近にさしかかったとき、中間の二人が線路わきのトロッコを発見し、これを手動で動かした途端、付近の山腹からのいっせい射撃に合い、二人とも重軽傷を負った。これを目のあたりに見たもう一人（上海同文書院出身）がターチョウを借りてくれたので四人で大石橋までたどりつくが、途中で食事には困り、何度となく国府軍から呼び止められた。

そこからは列車が数本だったが、日本人は乗車を拒否され、仲間と鐵路警護隊に嘆願し、やっと機関車（石炭車の部分）に重軽傷者を乗せることができた。兩人とも奉天にぶじ到着したか、いまなお気にかかってならない。その後、昭和二十一年七月十五日に病身の親とともに舞鶴港へ上陸し、日本における生活の第一歩が始まったのである。

敵中縦断二千里

北海道 小曾川 才松

戦雲亜細亜の空をおおった昭和十三年十月の上旬、とまきの流れに流されて青春時代の夢であった東京生活をなぐり捨てて国策にそうべく酷寒零下三十余度、枯木に宿る鳥もない満州に渡り私は開拓団の本部に勤務しました。

昼夜警備付で匪賊の出没を気にしながら異国の地に理想郷の建設に全員一致協力日夜努力を続けた結果、五年後には建築も全戸完了、続いて精米、製材、醸造、鍛工、酒造の各部建設他に学校、病院の新築も完了、各戸家族も大勢になりつつあった十九年には、戦局拡大不利になり同胞は次々に戦地に向かった。

私は昭和二十年五月十二日妻子と別れを告げ、当時の平安六八六歩兵部隊に入隊、まもなく国境に近い孫呉の北、石垣山の陣地構築に移動した。毎日が対戦車（人間